



寄稿
会長挨拶	01
JpGUフェロー顕彰	02
Bowie, Darwin, Attenborough	03
書評
「海洋の物理学」	04
「続 若き研究者の皆さんへ 青葉の杜からのメッセージ」	05
情報
「海洋物理船舶観測フェスタ2017」開催報告	05
Journal of Oceanography 目次	06
Oceanography in Japan「海の研究」目次	07
海洋学関連行事カレンダー	07
学会記事
春季大会報告	08
総会議事録	11
三賞推薦および環境科学賞推薦依頼	16
連載
アカデミアメランコリア (若手のコラム)	18



寄稿 ①

2期目の日本海洋学会会長を務めるにあたって

東京大学 大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻 日比谷 紀之

引き続き2019年3月まで、日本海洋学会の会長として学会の運営に携わることになりました。1期目の2年間では、会員の皆様のご協力のもと、会長就任当初に掲げていた目標のうち「大会におけるセッション提案制の導入」を実現するとともに、「他の学会や研究分野との連携の強化」と「日本海洋学会の国際化」についても、その実現に向けた基盤を築くことができました。今後は、まず、この方向性をより確固たるものにする必要があります。さらに、それに加えて、学術研究や社会のあり方が大きく変革しつつある時代において、日本海洋学会のあるべき姿と果たすべき役割を根本に立ち返って検討することで、その方向性を明確にしていきたいと考えています。具体的には「学会のメインイベントである春季/秋季大会のさらなる充実」および「日本海洋学会の体力の強化」を大きな目標として設定したいと思います。

今年度は、例年3月に開催していた春季大会を、5月に幕張で行われた日本地球惑星科学連合(Japan Geoscience Union: JpGU)と米国地球物理学連合(American Geophysical Union: AGU)との合同大会に合流させて開催しました。結果的には、日本海洋学会関連のセッション数は合計26件、要旨投稿数は515件で、従来の春季大会よりも研究発表件数は約1.3倍と大きく増加しました。これを反映して、日本海洋学会関連のセッションはいずれも大変な盛況で、活発な議論が交わされていました。また、海外からの著名な研究者も多数参加され、日本海洋学会の国際化という点でも成功裡に終えることがで

きました。大会期間中に開催された総会では、改めて私から提案させて頂いた「2018年度以降も春季大会をJpGUに合流させて開催する方針」を満場一致でご承認頂きました。

JpGUとの合流は、昨今の海洋分野を取り巻く状況を鑑み、日本海洋学会の国際化を図るだけでなく、地球惑星科学分野をはじめとする学術の動向を確認し、その中で海洋科学のプレゼンスを高めることを目指したものです。我々自身も地球惑星科学の広範な学術分野の中で海洋科学を俯瞰する機会をもつことで、従来の日本海洋学会の活動範囲に囚われない発想や視点を得ることができるようになります。活発で魅力ある海洋科学と日本海洋学会を、他の分野にアピールしていくことは、学会の将来にとって大きな意義があると考えます。そのためには、日本海洋学会は単にJpGUに合流するだけでなく、その運営にも積極的に参加し、会員の皆様にとってより有意義な大会になるよう働きかけていきたいと考えています。今回の春季大会での経験や、会員の皆様からのご意見を踏まえ、学会幹事会でもさらに議論し、JpGUと協議しながらより良い春季大会にしていく所存です。そしてJpGU参加学会と連携し、我が国における海洋科学の裾野を広げ、海洋科学の発展に向け努力していきます。

秋季大会は、開催地事務局を中心として、日本海洋学会会員が作りあげる大会です。メインである研究発表には「セッション提案制」のもと、会員の皆様からの意欲的な参画を期待しておりますが、分

野を問わず海洋に関わることを全般的に忌憚なく論じ合えるような大会にしたいと思っています。例えば、海洋関係の企業の方にも発表して頂く場があれば、研究と測器開発などの企業活動を繋ぐ良い機会にもなりますし、若手会員のキャリアパスを広げる機会にもなるはずですが、また、地域の特色を生かした企画などを通じて開催地の海洋関係者と交流して議論を交わすことも、今後の日本海洋学会の発展を考える上で大いに意味のあることと考えます。独自開催の大会である意義を十分に踏まえ、春季大会とは違った特色を出した有意義な大会となるように大会開催事務局とも協議を重ねていきたいと思っています。

もう一つの目標に掲げた日本海洋学会の体力の強化については、今までも学会内においてたびたび議論されてきたことで、今後の日本海洋学会の在り方にも大きく影響する重要な課題です。折しも、軍事研究を巡る問題などで見られるように、学術研究予算の目的が特定される方向になりつつあることや、科研費の平成29年度公募予定分より審査区分から「海洋」の文字が消えることなど、海洋科学を取り巻く状況は年々厳しさを増すばかりです。このような状況の中、会員数を増加させることや学会誌の充実、春季・秋季大会を魅力あるものにするために学会として努力することはもちろん大切に

ですが、海洋科学の分野だけではなく、海洋に関わる多様な分野と連携し、海洋科学全体を活性化していく必要があると考えています。昨年度、水産・海洋科学研究連絡協議会16学会/日本古生物学会と共同して学術会議へ提出した大型研究計画は、マスタープラン2017の重点大型研究計画の候補として65件のヒアリング対象に選ばれました。惜しくも最終的には重点大型研究計画としての採択には至りませんでした。次回の大型研究計画マスタープラン2020には今回の経験を活かして再挑戦し、海洋科学分野のブレークスルーに繋がっていただきたいと思います。また、若手研究者への支援も、海洋科学分野の裾野を広げ、将来の日本海洋学会のみならず地球惑星科学全体を担う人材の育成に繋がる有効な方策の一つです。若手研究者への支援拡大の実現など、学会の事業を充実していくためにも、日本海洋学会の予算の現状を詳細に検討するとともに、学会財政の改革にも積極的に取り組みたいと思っています。

引き続き日本海洋学会の運営にとともに取り組んで頂ける幹事の方々とも議論を深め、これらの難題に立ち向かい、日本海洋学会のさらなる発展のために邁進していく所存です。今後とも、会員の皆様の変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ致します。



寄稿②

鳥羽良明名誉会員が2017年度日本地球惑星科学連合フェローとして顕彰

東京大学 大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻 日比谷 紀之

2017年5月に千葉・幕張メッセで開催されたJpGU-AGU Joint Meetingにおいて、本学会の鳥羽良明名誉会員が「大気-海洋間の運動量および物質交換過程の研究における先駆的かつ顕著な功績、および衛星海上風観測技術確立への貢献による功績」により2017年度日本地球惑星科学連合フェローとして顕彰されました。

鳥羽会員は、京都大学在学中から風波の砕波による気泡と海水滴の生成についての研究に取り組み、シカゴ大学留学中には、海面起源の海塩粒子の大気中での輸送と分布様式の研究を進められました。その後、東北大学において長年にわたり海洋物理学講座を担当され、研究・教育に携わってこられました。

鳥羽会員の研究分野は、海面境界過程、すなわち、風波現象を含む大気と海洋の相互作用の局所的物理過程から風波を契機とする大規模な大気海洋相互作用、さらには、人工衛星による観測までも含む一連の分野にわたっており、独創的な手法で数々の業績をあげてこられました。最も著名な業績は、それまで単に波動の重ね合わせとして取り扱われていた風波を、波動・シア一流および乱流が結合した非線形性の強い現象としてその実態を実験的に解明し、いわゆる「Tobaの3/2乗則」として世界的に知られる風波の相似則を見出すとともに、それと整合的に高周波側の主要領域に存在する「Tobaスペクトル」を発見し、風波のパラメータ化の基礎を与えたことで

す。これらは風波の最も信頼性の高い巨視的な法則性とされ、現在も国内外の専門書に引用されています。このような一連の業績により、1989年には日本海洋学会賞、2003年には(社)全国日本学士会からアカデミア賞(文化部門)を授与されています。

また、鳥羽会員は、文部科学省(旧文部省)、日本学術会議、総理府(旧科学技術庁)、人事院等に関係する多くの委員や国際海洋物理学協会(IAPSO)副総裁などの要職を務められる等、内外の科学行政に大きく貢献されました。本学会においても、24年の長きにわたり評議員を務められるとともに、1989年から副会長を2年間、1991年から第10代会長を4年間務められる等多大な貢献をされており、その功績により2004年には本学会名誉会員の称号を授与されています。

今回の鳥羽会員の日本地球惑星科学連合フェローとしての顕彰は、以上述べてきたような地球惑星科学分野の学術の進展に関する顕著な貢献が高く評価されたものです。表彰式は5月23日(火)の夜、東京ベイ幕張ホールにおいて行われ、顕彰の際には海洋学会員のみならず参加者全員より盛大な拍手が送られました。

今回の顕彰に際し、鳥羽会員に心からお祝いを申し上げますとともに、今後も本学会および大気海洋分野での益々のご活躍を祈念致します。



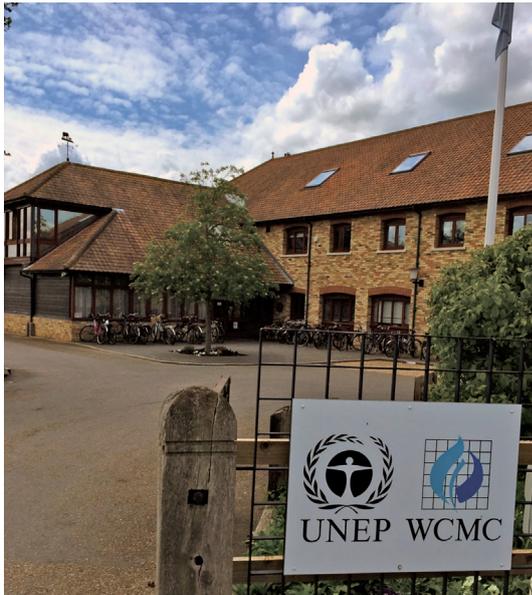
寄稿③

Bowie, Darwin, Attenborough

海洋研究開発機構 / UN Environment World Conservation Monitoring Centre 千葉 早苗

UN Environment -WCMC

2016年の2月より JAMSTEC の海外派遣研究員としてイギリス Cambridge の UN Environment (UNEP) World Conservation Monitoring Centre (WCMC) に勤務している。WCMC は UNEP 関連の NPO であり、広く生物多様性の保護管理に関して科学的知見と社会の要請に基づく政策決定を実現するための業務を実施している。私の所属する Marine Programme では、多様性データ／メタデータの収集解析、Aichi Biodiversity Targets や Sustainable Development Goals (SDGs) の達成に向けた環境影響および生態系指標の開発、より良い Marine Special Planning (MSP) のためのアセスメントとコンサルタントなどを実施している。対象は基本的にグローバルだが、クライアントの要請があればアジア、アフリカ等の地域アセスメントも請け負う。私も手探りながらそれらのプロジェクトに関わり日々多くを学んでいる (<https://www.unep-wcmc.org>)。



意外にこぢんまりした WCMC 外観

イギリスの自然保護の歴史とプライド

私が渡英したのはイギリスの Cultural Icon であった David Bowie が急逝した直後であった。そこそこで彼を惜しんだイベントが開催されていたが、ふと入った店で見つけたのは Bowie と並んで飾られている Sir David Attenborough の似顔絵パッチである。BBC の自然ドキュメンタリー番組などで知られる動物学者もこの国ではロックスター並みにクールなヒーローなのだ。まがりなりにも同業者の端くれとしてちょっと励まされた気持ちになった。WCMC は国際組織ではあるが、ひしひしと感じるのは自然や環境保護に関する欧州の意識の高さ、その中でも「我々がリーダー的責務を果たすのだ」というイギリスの歴史と自覚と誇りである。Newton、Darwin、Crick、Hawking など多くの偉大な科学者が学んだキャンパスを有

する Cambridge の街には Attenborough の名を冠する建屋に自然／野生動物保護のコンソーシアムがあり WCMC もその一員である。人類史上早くから都市化が進み自然破壊も顕著であった欧州の事情においても、その情熱や行動力には目を見張るものがある。



二人の David、Bowie と Attenborough

保護生物学と生物海洋学のコミュニケーション

WCMC 同僚の高いモチベーションと有能さに圧倒される一方で、これまで生物海洋学の視点から生物多様性を扱ってきた私としては、保護生物学における海洋生物多様性に対する意識や研究アプローチとのギャップを実感している。海洋学コミュニティにおいては物理／化学／生物過程の変動を地球環境の一部として統合的に扱う。また Global Ocean Observing System (GOOS) などの国際的枠組みにより全球観測システムの構築がすすんでいる。しかし、近年必須とされつつある科学的知見の社会への還元については、具体的なプロトコルが見つからずとまどっている現状である。保護生物学コミュニティでは、前述したように Aichi Targets のような国際目標達成のための指標開発を通じて科学的成果を政策意思決定に比較的スムーズにつなげるための枠組みがある。一方で、気候変動のような直接的な人間活動によらない地球規模の環境負荷の海洋生態系への影響評価指標の開発は遅れている。それならば、これまで希



Women power : ドイツでの国際会議中に同僚らと (筆者は左端)

薄であった両分野のコミュニケーションを強化することにより、互いの不足点を補い効率的に共通の目標達成が可能になるのではない。例えば、海洋学コミュニティが有している全球規模のプランクトンや炭酸系のデータを利用して現在空白になっている Aichi Target 10 (vulnerable ecosystem) や 15 (ecosystem resilience) の Global 指標を開発することは十分可能である。私が異分子として WCMC にいる意義もそこにあると考える。

Brexit、Post-Obama そして日本

社会への還元を意識した研究に加え、近年の海洋科学、生物多様性科学をとりまく動向としてグローバル化がある。全球観測ネットワークの構築やデータシェア、あるいは海域管理ルール策定に向けて多数の国際的枠組が計画、整備されつつある。しかし 2016 年国際政治の動向はそれとはまったく逆の方向を示した。イギリスの EU 離脱(Brexit)決定は多くの EU プロジェクトからファンドを得ている国内研究機関にとって大きな不安材料である。欧州他国でも反グローバリズムを掲げる政党が躍進するなど、シナリオによってはこれまで一大勢力となって海洋科学をリードしてきた EU の基盤がゆるぎかねない。現時点ではイギリスの EU 正式離脱後、科学を含むどの分野が特例としてこれまで通りの自由な交流を認めら

れるのか詳細は明らかになっていない。加えて米国では、海洋科学、生物多様性を含め地球環境科学推進の強力なサポーターであった Obama 大統領の退陣とともに、まったく逆のスタンスを示す Trump 政権が誕生し、科学者コミュニティの間で世界的に抗議の輪が広がっている。

振り返ってこのような状況のもと、日本は海洋科学において世界のコミュニティにとってどのような役割を果たすことができるであろう。歴史的経緯の違いがあり、一概に比較することはできないが、そもそも現在の欧州や米国と比較して日本の科学をとりまく状況ははたして「自由で健全で開かれた」ものであろうか？ 海洋科学はグローバルである、日本は決してガラバゴス化してはならない、と思う今日この頃である。

(追記) 2017 年 5 月に新しい UNEP のトップに Erik Solheim 氏が就任。「私の母でも理解できる」をスローガンに専門用語や組織の Acronym の撤廃を掲げるなど革新的なマネジメントを実践している。以降 UNEP は UN Environment となった。

注：本記事は、新学術領域研究「新海洋像：その機能と持続的利用(NEOPS)」のニュースレターに掲載した原稿を改変、転載したものです(<http://ocean.fs.u-tokyo.ac.jp/newsletter7.pdf>)



書評①

『海洋の物理学』

花輪 公雄 著

共立出版 2017年4月発行

B5判 210頁 本体 3,600円 ISBN 978-4-320-04712-9

評者：東海大学海洋研究所 久保田 雅久

久しぶりに海洋物理学の教科書が共立出版から発行された。その名もずばり「海洋の物理学」。そして著者は何と花輪公雄さんである。読む前から期待が高まるのは私だけでは無いだろう。ただ、要職につかれています(ひょっとしたら疲れていて)多忙な毎日を送っていると推測される著者が、このような立派な教科書を上梓されたこと自体、驚くべきことであると思う方も多いただろう。本当にそうなのだろうか？ 以前、とある委員会で花輪さんとご一緒したとき、お忙しい中、この委員会に出席するだけでも大変だろうと思っていた私の予想は大きく裏切られたことがある。ご本人から、この委員会への参加は気分転換になるとお伺いして、逆に普段、いかに過酷なお仕事をされているのかと思ったことがある。そう考えると、この教科書の執筆は苦痛に満ちた活動というよりも、サイエンスに接触できる貴重な時間を得られるという意味では、著者にとって激務の中の息抜きになったのかもしれない。

この本は「現代地球科学入門シリーズ」全 16 巻の中の 1 冊であり、著者はこのシリーズの編集委員も務めている。このシリーズの大きな特徴は、「刊行にあたって」に書かれているように、寿命の長い教科書を目指して、現代の最先端の成果を紹介しつつ、時代を超えて基本となる基礎的な内容を厳選して丁寧に説明することである。この目的に合致した教科書を書くということは、かなり難しいと思われるが、本書を読み終えて、再度、この目的を読むと、まさしく、

本書はこの目的を具現化していると痛感した。そして、それができるのは著者に相当な力量があることの証ではないかと思われる。

本書は全 14 章からなり、1. 地球と海、2. 海水の性質、3. 地球の熱収支、4. 海洋への強制力、5. 海洋の成層構造、6. 海洋の大循環、7. 海水の運動方程式と地衡流、8. 海洋大循環論、9. 海洋の短周期波動、10. 海洋の長周期波動、11. 潮汐と潮流、12. 海洋の観測と監視、13. 気候変動と海洋、14. 地球温暖化と海洋、という構成になっている。その構成からもわかるように海洋物理の基本的な分野は 11 章までに十分網羅されていて、寿命の長い教科書としてふさわしい内容となっている。また、12 章では海洋観測と監視について紹介しているが、従来の観測の中心であった船舶による観測に加えて、係留系観測、アルゴブイによる観測、さらには人工衛星によるリモートセンシングなどの新しい海洋観測方法についても説明している。最後の節「海洋観測データの取り扱いポリシー」の部分は、海洋観測に対する著者の視野の広さを感じる部分でもある。13 章では気候変動、14 章では地球温暖化といった近年大きな社会的問題となりつつある現象について述べるとともに、その中で海洋の役割について説明している。これを読めば、海洋がどちらの問題においても重要な役割を果たしていることは容易に理解できる。また、海水位の上昇や海洋の酸性化、あるいは海水温・塩分・海洋循環の変化に代表されるように、海洋自体も地球の温暖

化にともなって大きく変化しつつあることも実感できる。

海洋物理に関する適切な分野がバランス良く網羅されているという点で、この本は、著者の特徴が十分に生かされているし、寿命の長い教科書としての目的は十分に果たしていると思われる。ただ、著者自身も序文の中で述べているように、本書は入門の書であり、紙数の制限によって、詳細について割愛されている事項も多い。そこで、本書に書かれている部分の先を知りたいと思う読者も多いと

推測されるし、それこそが密かに目論まれた著者の意図かも知れない。だからこそ、本書をきっかけにして海洋物理に興味を持ち、専門的な教科書を読みたいと思う読者が少しでも生まれることを強く期待したい。本書は著者の学部3年生向けに行ってきた海洋物理学の講義ノートが土台になっているが、学生に限らず、海洋物理を初めて勉強するすべての読者にとって非常に有益な書であり、是非、読んで頂きたい1冊である。



書評②

『続 若き研究者の皆さんへ 青葉の杜からのメッセージ』

評者：東京大学大気海洋研究所 津田 敦

花輪 公雄 著
東北大学出版会ブックレット002 2016年12月刊行
A5判104頁 本体900円
ISBN 978-4-86163-275-4 C0340

本書は、東北大学海洋物理学講座の教授として、年頭や学期の初めにテーマを決めて研究室の学生らに話した内容を800字の原稿としてまとめ、2002年からは月に1回のペースで書いたものを取りまとめてある。1994年4月から2006年3月までの91編は『若き研究者の皆さんへ—青葉の杜からのメッセージ』としてまとめられ、今回はその続編である。表題からわかるように、学生などを対象に、研究の進め方やヒントを綴ったものであるが、決して説教臭くはなく、高い教養と温かさに裏打ちされている。私自身はどうしても学生を相手にすると説教臭く、または愚痴っぽくなってしまふのを最近反省しており、この本を読むように勧めるほうがずっと効率的ではないかと感じ入った。

今回は、2006年4月から2012年3月までの93編がまとめられている。花輪先生は2008-2010年に理学研究科長、2011-2012年に日本海洋学会長、2012年4月からは、東北大学の理事に就任

され、これを機に筆をおかれている。前巻は、研究室の学生に向けたメッセージという色合いが強かったが、より一般性のある発言が多くなったように感じた。研究室での紙媒体からウェブでの公表となり、潜在的な読者層も、研究室OB、学会関係者などに広がっていったことが想像できる。冒頭で述べられているように、「次第に思わず知らず研究室以外の人たちも意識したものとなっていった」。この簡単な履歴を見てもわかるように、この6年間は花輪先生にとっては、激動の時期だったに違いない。次々と責任あるポジションをこなし、また、なんといっても2011年3月には東日本大震災があった。著者の意図には沿わないかもしれないが、書かれた日付と当時の立場を考えながら読むと800字がより一層の広がりを持つように感じた。「若き研究者の皆さん」が対象であるが、若くない私にも、十分勉強になるブックレットであった。幅広い年齢層の方に読んでいただきたい。



情報①

「海洋物理船舶観測フェスタ2017」開催報告

海洋研究開発機構 瀬瀬 慎也

東京大学大気海洋研究所共同利用研究集会として、2012、2014年に続く3回目の開催となる本研究集会は、様々な機関で実施されている海洋物理船舶観測に関係した研究の成果・計画を紹介し合うことで科学的知見・観測機会・手法、及び、問題点を共有しコミュニティの発展に資することを目的としている。2017年は5/26、27の2日間19件の発表で構成され、JpGUの直後にも拘らず、約40名の関係者に参加いただいた。発表内容は、国内外の海洋物理船舶観測活動に係る動向、海洋観測を通じた科学的成果、海洋観測計画、及び、船舶観測と組み合わせるべき新規プラットフォームの主に4つのテーマに大別されるものであった。研究集会名は、「海洋物理船舶観測」という比較的对象を絞ったものであったが、実際には数値モデルを主な手法としたり、海洋化学が専門の研究者にも参加いただき広い視点を提供していただいた。

海洋物理船舶観測に係る動向としては、北海道大学おしよる丸、

神戸大学深江丸を事例に、これまで実践してきた練習船で科学観測を行う意義付けや運航・観測支援体制の不足を補う活動が紹介された。これらは、本学会員が利用可能な観測機会・データを増やす試みとして非常に重要である。長期にわたり定線観測を実施している気象庁では、歴史的変遷を経つつも、観測の意義付けを行うことによって比較的広域の観測網が維持されていることが紹介された。近年では、こうした観測網の維持のためにも、国内外の多くの研究者によってデータがより有効利用されるような活動にも力を入れているという報告は、我々海洋科学のコミュニティにとっては頼もしいものであった。一方で、より大きな動きとして国内外の船舶観測の機会が減少するとの予測がなされており、これはGO-SHIP (The Global Ocean Ship-Based Hydrographic Investigation Program) やDOOS (Deep Ocean Observing Strategy) といった国際的観測プロジェクトでも強く認識されていることが紹介された。この中では、

国際的にも分野横断的プロジェクトの元で観測が実施される方向であることが紹介されるとともに、データ利用者の必要性に対する高い意識付け、データ管理の重要性、既存の効率よい手法の利用推奨などを含み、科学的・社会的要求に従った観測の実施、データの公開という観測研究の一連の流れを定義付けた Framework for Ocean Observing (FOO)に基づいた観測活動・計画が推奨されているとの報告があった。こうした国際的取り組みを十分理解し、発見的研究だけでなく、船舶観測活動における海洋物理要素の重要性をより定量的に評価する研究計画及びその計画に対する説明が必要であるとの重要な指摘もあった。その最も基礎的な活動として、船舶観測の効率的な利用が重要であることが改めて認識された。また、日本海を対象とした水産試験場船舶データの利用を含めた長年の観測研究活動の成果・近況や、アジア各国の船舶を実際にブイ設置などに利用した例の紹介は、船舶観測有効利用の実例として捉えることができた。

観測の解析成果としては、乱流拡散観測手法の評価・展開、高密度サブメソスケール観測、深層流の短周期変動の研究が紹介された。深層流短周期変動の研究では、係留系を利用することで計測事例の少ない深層の中規模擾乱に伴う流れの周期性の把握をより詳細に行うことに成功したことが報告された。また、サブメソスケールの研究では、船舶の移動速度と XCTD を利用することで高密度観測に成功し、黒潮主流北部に存在した渦の縁とその内部にストリーマー状の低塩構造を捉えることに成功していた。さらに、乱流観測手法の検討においては、より信頼性の高いシア観測との実海比較を通して水温の微小構造からの推定信頼性を評価する研究が紹介され、その精度評価は発展途上ながらも、既に日本東方沖で乱流拡散を対象とするものとしては稀な規模の観測がされていることが報告された。どれも観測事例としては貴重なものであったが、想定されるよりよい適用事例の不足や時空間、あるいは物理現象としての代表性に対する考慮の必要性が参加者より指摘された。これらの指摘は、定量化や一般性を求める海洋物理を船舶観測に基づいて実施する際に研究途上に見受けられる一般的な課題であって、指摘は若手発表者自身だけでなく多くの参加者にとっても有意義のものであったと信じたい。また、これらの研究が白鳳丸の1観測航海にて取得されたデータを利用している点は、海洋物理分野においても観測

が研究者を育み得る実例として重要であろう。

実施途上にある観測計画については、海洋の乱流混合を明らかにするプロジェクト(OMIX)や、海面フラックス観測と表層混合変化を把握する観測とその発展でもある植物プランクトンの変動の研究、及び、北太平洋の所謂、磯口ジェットを対象とした研究とその発展はそれぞれ対象海域が十分練られており、目的の場に行く手段、及び、現地での観測プラットフォームとして船舶が利用されていた。どの観測も複数の手法、領域に跨る観測研究を展開しており、先の国際的な流れを汲んだような研究が実際に国内でも活発に行われている様子を明らかにしたものと見える。また、黒潮が急峻地形に乗り上げることによる強い乱流に着目した研究や、磯口ジェットの定常性への疑問に端を発した研究は、物理学的興味を掘り下げから多分野観測・研究が展開されるに至ったという経緯があり、分野横断的研究への発展のあり方の一つとして非常に興味深い。

船舶観測と組み合わせるべき有力な手法として Argo プロジェクトの推移・発展、グライダーによる観測、ドローンの利用可能性についても紹介された。Argo プロジェクトは、全球の水温・塩分場の把握という意味においてはなくてはならないものになっているが、その維持には未だ多大な努力を必要としていること、また、観測精度の検証の必要性などから船舶観測など他プラットフォームとの組み合わせでより完備したシステムとなっている点が紹介された。今後の流れとしては Argo でも生物化学的観測を行う計画も紹介され、海水分析を十全に行える船舶観測とより有機的に結びつけた観測計画が今後必要になると考えられた。ドローンやグライダーのように全く新しい観測プラットフォームを含め、近年減りつつある船舶観測の機会を如何に効率的に利用するかが、大きな課題としてここでも浮彫りになったといえる。

本研究集会では敢えて“海洋物理船舶観測”と限定したが、コンビナーの力不足を十分ご理解いただいた上で、参加者はより広い視点に立ち、分野横断的研究が実際に実施されている様や、他手法との比較などを通じた研究活動全体について議論・報告をいただいた。実際に他手法、多分野の方々を招き入れ、より実際の観測研究計画を練られるような場が必要であるとの貴重な意見もいただいております。より分野横断的研究を意識した議論の場へと発展させることも考えていきたい。



情報 ②

Journal of Oceanography 目次

Journal of Oceanography

Volume 73 · Number 3 · June 2017

ORIGINAL ARTICLES

Offshore detachment of the Changjiang River plume and its ecological impacts in summer

Q. Wei · Z. Yu · B. Wang · H. Wu · J. Sun · X. Zhang · M. Fu
C. Xia · H. Wang 277

Oceanic eddy-driven atmospheric secondary circulation in the winter Kuroshio Extension region

L. Chen · Y. Jia · Q. Liu 295

Temporal variations in phytoplankton biomass over the past 150 years in the western Seto Inland Sea, Japan

N.K. Tsugeki · M. Kuwae · Y. Tani · X. Guo · K. Omori · H. Takeoka
309

Long-term variation in the salinity of the Southern Yellow Sea Cold Water Mass, 1976–2006

A. Li · F. Yu · G. Si · C. Wei 321

Dissolved iron and zinc in Sagami Bay and the Izu-Ogasawara Trench

H. Obata · J. Nishioka · T. Kim · K. Norisuye · S. Takeda
Y. Wakuta · T. Gamo 333

Seasonal dynamics influencing coastal primary production and phytoplankton communities along the southern Myanmar coast

Maung-Saw-Htoo-Thaw · S. Ohara · K. Matsuoka · T. Yurimoto
S. Higo · Khin-Ko-Lay · Win-Kyaing · Myint-Shwe · Sein-Thaung
Yin-Yin-Htay · Nang-Mya-Han · Khin-Maung-Cho
Si-Si-Hla-Bu · Swe-Thwin · K. Koike 345

Comparison of carbonate parameters and air–sea CO₂ flux in the southern Yellow Sea and East China Sea during spring and summer of 2011

B. Qu · J. Song · H. Yuan · X. Li · N. Li · L. Duan 365

Comparison of community structures between particle-associated and free-living prokaryotes in tropical and subtropical Pacific Ocean surface waters

S. Suzuki · R. Kaneko · T. Kodama · F. Hashihama · S. Suwa
I. Tanita · K. Furuya · K. Hamasaki 383

SHORT CONTRIBUTION

Negligible effect of the benthic fauna on measuring the nutrient upward fluxes from coastal sediments

K. Tada · J. Koomklang · K. Ichimi · H. Yamaguchi 397



情報 ③

Oceanography in Japan 「海の研究」 目次

第 26 卷 4 号 (2017 年 7 月)

【総説】

黒潮の流路・流量変動の研究—源流域から九州東岸まで—

中村 啓彦 113 – 147



情報 ④

海洋学関連行事 カレンダー

JOSNL 編集委員 小守 信正

2017 年度日本海洋学会秋季大会

日程：2017 年 10 月 13 日(金)–17 日(火)

会場：仙台国際センター、東北大学 青葉山北キャンパス(仙台市青葉区)

ウェブサイト：<http://www.jp-c.jp/jos/2017FM/>

Asian Conference on Meteorology 2017 (ACM2017) “Changes in Extreme Weather, Climate, and Environment in a Warmer World: Observation and Prediction”

日程：2017 年 10 月 23 日(月)–24 日(火)

会場：Busan Exhibition and Convention Center (Busan, Korea)

ウェブサイト：<http://www.komes.or.kr/acm2017/>

日本気象学会 2017 年度秋季大会

日程：2017 年 10 月 30 日(月)-11 月 2 日(木)
会場：北海道大学 学術交流会館(札幌市北区)
ウェブサイト：<http://www.metsoc.jp/topics/meetings/msjvisitors2>

5th International Conference on Reanalysis (IRC5)

日程：2017 年 11 月 13 日(月)-17 日(金)
会場：Pontifical University of Saint Thomas Aquinas(Rome, Italy)
ウェブサイト：<https://climate.copernicus.eu/events/5th-international-conference-reanalysis>

2017 年度水産海洋学会研究発表大会

日程：2017 年 11 月 16 日(木)-19 日(日)
会場：広島市西区民文化センター(広島市西区)

第 8 回極域科学シンポジウム

日程：2017 年 12 月 4 日(月)-8 日(金)
会場：国立極地研究所、国立国語研究所(東京都立川市)
ウェブサイト：<http://www.nipr.ac.jp/symposium2017/>

2017 AGU Fall Meeting

日程：2017 年 12 月 11 日(月)-15 日(金)
会場：Ernest N. Morial Convention Center (New Orleans, USA)
ウェブサイト：<http://fallmeeting.agu.org/2017/>

98th AMS Annual Meeting “Transforming Communication in the Weather, Water, and Climate Enterprise”

日程：2018 年 1 月 7 日(日)-11 日(木)
会場：Austin Convention Center (Austin, USA)
ウェブサイト：<https://annual.ametsoc.org/2018/>

5th International Symposium on Arctic Research (ISAR-5) “The changing Arctic and its regional to global impact: From information to knowledge and action”

日程：2018 年 1 月 15 日(月)-18 日(木)
会場：一橋講堂(東京都千代田区)
ウェブサイト：<http://www.jcar.org/isar-5/>

2018 Ocean Sciences Meeting

日程：2018 年 2 月 11 日(日)-16 日(金)
会場：Oregon Convention Center (Portland, USA)
ウェブサイト：<http://osm.agu.org/2018/>

平成 30 年度日本水産学会春季大会

日程：2018 年 3 月 26 日(月)-30 日(金)
会場：東京海洋大学 品川キャンパス(東京都港区)

EGU General Assembly 2018

日程：2018 年 4 月 8 日(日)-13 日(金)
会場：Austria Center Vienna (Vienna, Austria)
ウェブサイト：<http://www.egu2018.eu/>

日本気象学会 2018 年度春季大会

日程：2018 年 5 月 16 日(木)-19 日(日)
会場：つくば国際会議場(茨城県つくば市)

日本地球惑星科学連合 2018 年大会

日程：2018 年 5 月 20 日(日)-24 日(木)
会場：幕張メッセ(千葉市美浜区)

AOGS 15th Annual Meeting

日程：2018 年 6 月 3 日(日)-8 日(金)
会場：Honolulu, USA

4th International Symposium: The Effects of Climate Change on the World's Oceans

日程：2018 年 6 月 4 日(月)-8 日(金)
会場：Washington Hilton (Washington, D.C., USA)
ウェブサイト：<http://meetings.pices.int/meetings/international/2018/climate-change/background>

4th International Symposium on Integrated Coastal Zone Management

日程：2018 年 7 月 2 日(月)-5 日(木)
会場：Tyholmen Hotel (Arendal, Norway)
ウェブサイト：<http://www.imr.no/iczm2018>



学会記事 ①

2017 年度 日本海洋学会春季大会 報告

大会実行委員会 委員長 川合 義美

大会日程：2017 年 5 月 20 日(土)～5 月 25 日(木)
大会会場：幕張メッセ国際会議場・東京ベイ幕張ホール
大会実行委員会 委員長：川合 義美(国立研究開発法人海洋研究開発機構)2017 年 4 月～
原田 尚美(国立研究開発法人海洋研究開発機構)～2017 年 3 月

1. 春季大会と実行委員会の概要

2017 年度日本海洋学会春季大会は、日本地球惑星科学連合(JpGU)の大会に合流する形で行われました。JpGU の 2017 年度大会は米国地球物理学連合(AGU)との初めての合同大会“JpGU-AGU Joint Meeting 2017”(以下、合同大会)として開催されました。日本海洋学会(以下、学会)の 2017 年度春季大会実行委員会は、JpGU 担当幹事、集会担当幹事、研究発表担当幹事、学会選出連合

プログラム委員、各2名の計8名で構成され、原田尚美幹事(当時)が委員長を務めることが2016年秋季の評議員会で承認されました。この時の実行委員の任期は2017年3月末までで、2017年4月から新幹事に引き継がれました。

2. セッション・講演数

合同大会全体の全参加者は8,450名、セッション数は253件、講演件数は5,645件、講演者の属する国・地域は50と盛況のうちに幕を閉じました。セッション数は過去3年間は190件前後でしたが、今年度は一気に3割増えました。講演数も順調に増加しており、昨年度から23%増となっています。合同大会ということで、AGUからの投稿は約1,000件ありました。セッション、講演数は各セクションで増加しましたが、特に大気水圏セクションはセッション、講演数ともに昨年度から倍増しました。

学会が共催したセッションは26件、これらのセッションへの要旨投稿数は合計515件となり、これまでの春季大会の要旨投稿数400件前後と比べると投稿数は約1.3倍と大きく増加しました。また、共催セッションも含めて海洋が関係するセッション(領域外・複数領域を含む)は合同大会全体で約40件に及びました。

3. 学会の会合

例年3月の春季大会時に行われていた総会、評議員会、各種委員会も合同大会に合わせて幕張メッセ国際会議場の会議室で行われました。会議室の使用は有料であるため、2~3の委員会を同じ部屋で同時に開催しました。(JpGU大会に参加登録していない方は「会合名札」を受付で受け取るにより、参加費を払うことなく会合のみ出席することが可能です。)

日 時	会合名
5月20日 12:30-13:30	Journal of Oceanography 編集委員会
// 12:30-13:30	海の研究編集委員会
// 18:30-19:30	沿岸海洋研究会委員会
5月21日 12:30-13:30	三賞選考委員会
// 12:30-13:30	論文賞選考委員会
// 12:30-13:30	環境科学賞選考委員会
// 18:30-20:30	評議員会
5月22日 12:30-13:30	教育問題研究会
// 12:30-13:30	海洋環境問題研究会
// 18:30-20:30	日本海洋学会 総会

4. フェロー・西田賞の表彰

2017年度日本地球惑星科学連合フェローに選ばれた鳥羽良明名誉会員と、第2回地球惑星科学振興西田賞を受賞された川合美千代会員が、他分野の受賞者とともに5月23日(火)18:30から開催された表彰式で表彰を受けました。川合美千代会員の西田賞受賞は日本海洋学会員としては初めてのことです。おめでとうございます。

5. 展示

合同大会では、民間企業や大学、研究機関による一般展示ブース(74ブース)、書籍出版・関連商品の展示ブース(30ブース)、大学の紹介パネル(11枚)、パンフレットデスク(9か所)、及び学協会デスク(13か所)が設けられ、様々な分野の多彩な展示が催されま

2017年度日本地球惑星科学連合フェロー 鳥羽良明名誉会員

授賞理由：大気-海洋間の運動量および物質交換過程の研究における先駆的かつ顕著な貢献、および衛星海上風観測技術確立への貢献による功績により



第2回地球惑星科学振興西田賞 川合美千代会員

授賞理由：北極海における起源の異なる水塊の混合と物質循環に関する化学海洋学的研究



した。NASAとJAXAは共同で大画面による衛星観測による最新の研究成果を紹介する「ハイパーウォール展示」を毎年開催しています。

学会も広報委員会のメンバーが中心となって、国際会議場1階のフロアの学協会デスクで学会を紹介する展示を行いました。デスクには入会案内、パンフレット、会場案内図、セッション・会合一覧表、今年7月出版予定の「海の温暖化」(朝倉書店)の草稿と予約受付票などが置かれました。入口・受付に最も近い場所だったことも幸いし、学会員以外の参加者も多数、海洋学会のデスクに立ち寄って頂けました。

6. イベント

展示の他にも、JpGU主催で様々なイベントが催されました。毎年開催しているランチタイムスペシャルレクチャー、表彰式、懇親会、International Mixer Luncheonなどに加え、Lucy Jones先生とノーベル賞を受賞された梶田隆章先生による基調講演、学生と若手研究者が語り合う「おしゃべり広(Bar)場」、アイスブレイカー、AGU Town Hall Meetingなど今回から新たなイベントも企画され、盛りだくさんな大会となりました。

今回の新たな企画の一つに、5月21日(日)19:00から行われた

JpGU フットサル大会「GEOFUT 17」があります。チームで参加することも個人で参加することも可能で、学会の有志は「日本海洋学会チーム(チーム名: Oceanographers)」として参加しました(末尾の番外編をご覧ください)。2018年度以降も開催されるかどうかは現時点で未定ですが、開催の折にはぜひ積極的に参加して楽しんで頂ければと思います。

7. 本大会を振り返って

JpGU 大会に合流するという、学会にとって歴史的なターニングポイントとなる大会になりましたが、多くの学会員にご参加いただき、海洋関係のセッションも多数生まれ、大変盛況な大会となりました。たまたま AGU との合同大会の年にあたったこともあり、多くの海外研究者と接する機会ができて、特に学生や若手研究者の方々には良い刺激になったのではないかと思います。

運営に関しては実質的に JpGU にお任せする形になりましたので、学会の大会実行委員会(≒幹事会)として行ったことは、前年のセッション提案やその調整、総会・評議員会・各種委員会の準備・開催、学協会デスクでの展示といったものになりました。実行委員会及び幹事会は提案予定のセッションの情報を会員から提供してもらい、必要に応じて類似セッションの合同開催提案や一般セッション提案を行いました。学会提案のセッションは少数の会場で連続してプログラム化されるよう要望を出すなどしました。

似たようなテーマのセッションが同じ時間帯に同時進行しているといった、プログラム編成に関する問題を会員の方々から指摘いただきました。JpGU 大会のプログラムは、各セクション代表のプログラム委員、プログラム委員長、副委員長が核となって編成しています。近年セッション数が増加していることもあり、プログラム編成は難解なパズルに挑むようなつらい作業になっています。なかなかご希望に沿えないこともあります。過去に JpGU 大会のプログラム編成を経験した者としては、どうかご理解をお願いしたいところではあります。プログラム委員には各学協会からも委員を選出しておりますので、学会として優先順位や最低限の希望をセクション代表プログラム委員に強く主張しておくことで、学会としての意向を「ある程度」反映させることは可能かと思えます。

JpGU 大会に合流することにより、学会員、特に関東地区の会員の大会運営にかかる負担が大幅に軽減する反面、これまでのように大会の黒字分(大会戻り金)が学会の会計に入ることがなくなり、逆に委員会等を開催するための部屋の使用料が支出として増えるというデメリットもあります。また、JpGU 大会の参加費・投稿料は国際学会としては安い部類に入りますが、これまでの学会の春季大会と比べると大幅に高く、今後、学会の財政のあり方自体を含めて検討する必要があるようです。

JpGU 大会では学生を対象として学生優秀発表賞を設けており、優秀な発表を表彰しています(口頭、ポスターともに対象)。また、日曜日には高校生によるポスターセッションが開催され、今年は 81 件の発表がありました。高校生セッションには海洋酸性化や乱流など海洋関係の研究発表も何件もあり、全体的にも想像以上にレベルが高く、活気のあるセッションとなりました。ただ、学生優秀発表賞と高校生セッションの審査員を集めるのが(顕彰委員やセクション幹事にとって)毎年の悩みの種になっております。ぜひ来年以降も将来を担う高校生や学生の発表に関心を持っていただき、出来るだけ審査にもご協力いただければ幸いです。

2018 年度、2019 年度の JpGU 大会はまた通常の大会に戻りますが、2016 年度と同様に AGU とのジョイントセッションを提案できることになると思われます(詳細未定)。また、2020 年度かその近くの年の大会を再び AGU との合同大会にすることが現在、JpGU で検討されています。JpGU は今度更に強力に国際化を進めていくこととなります。

最後になりましたが、日本海洋学会春季大会が円滑に合同大会に合流できたのは、学会員皆様のご協力とともに、JpGU 事務局の方々のご助力によるところも大きく、ここに厚く御礼申し上げます。

8. 来年度の日程

2018 年度日本海洋学会春季大会も、2017 年度と同様に JpGU 大会にて開催されます。2018 年度の JpGU 大会の会場は幕張メッセ国際会議場、日程は 5 月 20 日(日)から 24 日(木)の予定です。2017 年度は AGU との合同大会のため会期が 6 日間と長くなりましたが、2018 年度は例年通り 5 日間となります。今年も 9 月 1 日(金)からセッション提案が開始される予定ですが、詳細が決まり次第、会員の皆様にご連絡いたします。2018 年度大会も積極的なセッション提案をお待ちしております。

番外編

JpGU フットサル大会「GEOFUT 17」報告 山口凌平(東北大学)

日時: 5 月 21 日(日) 19:00 ~ 22:00

場所: ZOZOPARK HONDA FOOTBALL AREA

(海浜幕張駅の東、徒歩 5 分)

参加: 7 名(海洋学会チームとして)

他に AORI チームとしての参加者多数)

内訳: 女 1、男 6(院生 2、社会人 5)

形式: 参加チームは合計 12 チーム。人工芝コートでの 5 対 5 フットサル。はじめに 2 ブロックにわかれ予選リーグ 5 試合(1 試合 7 分)を行い、各リーグの 1-2 位、3-4 位、5-6 位がそれぞれ決勝、中位、下位トーナメント(1 試合 10 分)で順位を決定する。

活動内容: 参加全 12 チーム中、唯一の“学会”という枠組みでのエントリーとなった海洋学会チームは、予選リーグ序盤、なかなか連携が取れないながらも善戦し、第 1、第 2 試合となんとか引き分け勝ち点 2 を獲得する。続く第 3、第 4 試合では徐々に攻守が噛み合い始め、当日結成されたのが嘘のような連携から女性ゴール(得点 2 倍)などの大量得点と堅守によって 2 連勝し一気に決勝トーナメント進出を決める。予選リーグ最終戦、勝てば 1 位通過となる 1 戦では、疑惑? のゴールによって惜しくも引き分け、2 位での決勝トーナメント進出となる。

決勝トーナメント 1 回戦の対戦相手は、この日のために練習を重ねてきたという東大地震研チーム。そんな強敵を前に海洋学会チームは、ここまでの膨大な疲労の蓄積もあいまって、決定機をつくれないうま 0-1 で敗退、3 位決定戦へ。3 位決定戦では、予選リーグ同グループ 1 位に借りを返す、危なげない勝利によって 3 位として大会を終える。

大会終了後には表彰式と懇親会が開かれ、参加チーム同士が健闘をたたえ合った。



2017年度 日本海洋学会 通常総会 議事録

日時：2017年5月22日(月) 18:30～20:10

会場：幕張メッセ国際会議場 103

出席者：出席 83名、委任状 249名、計 332名

1. **開会**：北出集会担当幹事より、学会会則第4章第28条の規定による定足数に達しており、総会の成立要件を満たしている旨報告があった。

2. **議長選出**：須賀利雄会員を議長として選出した。

3. **会長挨拶**：日比谷会長

総会開催に先立って、宗林由樹会員と新野宏会員が2017年度科学技術分野の文部科学大臣表彰において科学技術賞を受賞した件、鳥羽良明会員がJpGUフェローに選出された件、JpGU若手賞の西田賞を川合美千代会員が受賞した件について報告された。JpGU会期中に日本海洋学会の各種委員会が開催された件、日本海洋学会共催26件(44コマ)および日本海洋学会関連セッション515件の発表があった件、海洋生物学研究会が設立され、3月に複数の共催シンポジウムが開催された件、他学会と連携して大型研究計画を申請し、学術会議におけるヒアリング対象研究計画65件の中に採択された件、ロードマップに掲載申請中である件等について報告があった。

4. 報告事項

1) **会務報告**：2016年度会員異動状況、受賞記念講演座長、宇田賞に関する細則の変更、Journal of Oceanography、「海の研究」、JOSニューズレターの発行状況、2016年度秋季大会の報告および2017年度秋季大会の予告、2017年度各賞受賞候補者の選定結果、各賞候補者選考委員会委員の選挙結果、各委員会・研究会・支部の活動状況などについて報告があった。

ブレイクスルー研究会に関して、会員が報告した方が良いのではとのコメントがあった。また、新規研究会の発足に関する質問があり、幹事会へ提案いただき評議員会で承認することで立ち上げ可能である旨が回答された。

2) **学界関連報告**：学界関連情報が紹介された。詳細はJOSニューズレター最新号に掲載されている。また、JpGUおよび水産・海洋科学研究連絡協議会に関する報告がなされた。

JpGUに関し、海外参加者の来年度見込みに関して質問があり、国際セッション開催を進めている旨および来年度以降もJpGU会員でなくても(AGU、EGUおよびAOGS会員であれば)参加可能である旨、回答があった。

3) **その他**：「軍事研究と海洋科学を考える談話会」に関し、開催報告がなされた。

5. 審議事項

1) **2016年度事業報告ならびに決算報告について**：配布資料に基づき説明があった。

2) **2016年度監査報告について**：2016年度の会計処理が適切に行われていたことを確認した旨報告があった。監査報告を踏まえ、2016年度事業報告、決算報告、監査報告が承認された。

3) **2017年度事業計画並びに予算案について**：配布資料に基づき説明があった後、原案が承認された。

なお、JpGUへの日本海洋学会からの支出に関して質問があり、各種委員会会場費として14万円、会費1万円を支出している旨回答があった。

4) **会則変更について**：幹事および編集委員長・編集委員の委嘱に関する変更について会則の変更が提案され、承認された。

新会長選出が1月であり、5月の評議員会で編集委員長が幹事に加わることを承認するまでの空白期間の対応について質問があり、評議員会のメール審議で対応することが確認された。

5) **2018年度以降の春季大会について**：2018年度以降の春季大会をJpGU大会の中で開催する旨が承認された。JpGUと秋季大会で研究発表の内容が重複する場合について質問があり、程度を考えていただきたい旨回答があった。会員に開催方法に関するアンケートを取ることに提案があり、準備中である旨回答があった。

秋季大会の具体的な活性化について幹事会で検討してほしい旨、またJpGU大会について、通常総会の時間帯を考慮してほしい旨、他学会の類似セッションとの融合を進めてほしい旨、学生が参加しやすい料金設定を検討してほしい旨の意見があった。全ての要望について前向きに検討する旨回答があった。

6. その他

学会ホームページに総会の議事次第や資料を早めに掲載し、幹事会や評議員会の議事録が掲載された際には会員メーリングリストに流してほしい旨の意見があった。幹事会で検討する旨回答があった。

以上

2017年度 日本海洋学会各賞授賞式

日時 2017年5月22日(月) 20:15～20:42

会場 幕張メッセ国際会議場 103

1. 日本海洋学会賞：須賀利雄会員に授与した。
2. 日本海洋学会岡田賞：杉江恒二会員および土井威志会員に授与した。
3. 日本海洋学会宇田賞：市川洋会員に授与した。
4. 日本海洋学会日高論文賞：中村啓彦会員および真壁竜介会員に授与した。
5. 日本海洋学会奨励論文賞：児玉武稔会員および増永英治会員に授与した。
6. 日本海洋学会環境科学賞：一見和彦会員に授与した。
7. 宇田賞を受賞した市川洋会員より挨拶があった。
8. 環境科学賞を受賞した一見和彦会員より挨拶があった。

日本海洋学会 2016年度 決算報告

(2016年4月1日～2017年3月31日)

収入の部

単位：円

科 目		予算額(A)	決算額(B)	差引額(B)-(A)	摘 要
1. 会費収入		16,749,400	21,342,000	4,592,600	* 納入者数 / 2017年2月末の会員数
2016年3月～2017年2月 (合計金額 17,419,000円)	通常会員会費	13,008,600	13,151,000	142,400	1,167/1,280人 納入率 93%
	通常会員会費 (シニア)	568,800	651,000	82,200	80/72人 納入率 113%
	学生会員会費	972,000	945,000	-27,000	158/164人 納入率 96%
	賛助会員会費	760,000	760,000	0	19/20人 納入率 95%
	団体会員会費	1,440,000	1,344,000	-96,000	56/57人 納入率 98%
	終身会員会費	0	568,000	568,000	11人
2017年3月 (合計金額 3,923,000円)	通常会員会費	-	3,301,000	-	* 納入者数 / 2017年3月末の会員数 299/1,259人 納入率 24%
	通常会員会費 (シニア)	-	168,000	-	21/69人 納入率 30%
	学生会員会費	-	36,000	-	5/132人 納入率 4%
	賛助会員会費	-	80,000	-	2/20人 納入率 10%
	団体会員会費	-	288,000	-	12/55人 納入率 22%
	終身会員会費	-	50,000	-	1人
2. 事業収入		2,399,000	3,068,000	669,000	
	広告収入	519,000	387,000	-132,000	*NL掲載広告2件、名簿広告掲載6件
	会誌売上収入	795,000	810,000	15,000	
	刊行物売上収入	35,000	56,000	21,000	* 春季7、秋季7
	JO掲載料	1,050,000	1,815,000	765,000	65件
3. 積立金		823,000	523,152	-299,848	
	環境科学研究助成	823,000	523,152	-299,848	宇野木基金より
4. 雑収入		1,005,000	1,124,031	119,031	
	受入利息	5,000	2,424	-2,576	
	著作権料	1,000,000	1,057,607	57,607	*Springer印税61万、JST12万、JAC28万
	その他	0	64,000	64,000	* 若手助成戻り1件
5. 寄附金		300,000	2,419,891	2,119,891	
	日本海洋科学振興財団	200,000	200,000	0	
	海口マン21	100,000	100,000	0	
	大会開催戻り金	0	2,119,891	2,119,891	*2016年春季45万、2016年秋季166万
6. 学会基本 から一時繰入		0	0	0	
小 計		21,276,400	28,477,074	7,200,674	
前期繰越金		8,466,323	8,466,323	0	
合 計		29,742,723	36,943,397	7,200,674	

2016年度決算報告 説明

2016年度は13か月(2016年3月から2017年3月)の変則会計期間となった。また、3月は次年度会費納入の多い月であるため、収入を2017年2月までと2017年3月の二つに分けてまとめた。2017年2月までが予算案で想定した期間であり、おおよそ予算案に近い会費収入があった。

2017年3月の会費収入は総額3,929,000円である。これは2017年度の会費として納められたものが大半を占める。

2016年度収入決算額は予算案に比べ7,200,674円の増であった。この主なものは、上記の2017年3月納入の会費約393万円と大

支出の部

単位：円

科 目		予算額(A)	決算額(B)	差引額(B)-(A)	摘 要
1. 管理費		9,140,000	10,525,665	1,385,665	
	業務委託費	6,800,000	8,041,311	1,241,311	*2016年3月～2017年3月分(13ヶ月分)
	会議費	370,000	392,465	22,465	
	旅費交通費	650,000	389,580	-260,420	
	通信運搬費	350,000	392,654	42,654	
	消耗品費	450,000	467,869	17,869	*コピー代,封筒制作費等
	雑費	520,000	841,786	321,786	
2. 事業費		15,731,200	14,740,432	-990,768	
	大会開催費	1,000,000	1,000,000	0	
	海洋環境問題研究会	100,000	100,000	0	
	海洋生物学研究会	0	50,000	50,000	
	教育問題研究会	100,000	100,000	0	
	女子中高生夏の学校経費	50,000	17,352	-32,648	
	JO発行経費	6,267,200	6,266,444	-756	*6回分、編集委員会費を含む
	海の研究発行経費	1,590,000	1,280,216	-309,784	*6回分、編集委員会費を含む
	JOS ニュースレター発行経費	1,480,000	1,457,484	-22,516	*4回分
	広報委員会	150,000	150,000	0	
	会誌送料	880,000	780,237	-99,763	
	会員名簿発行費	800,000	723,028	-76,972	*会員名簿制作費
	会員情報管理 WEB システム初期費用	1,050,000	736,449	-313,551	
	送金手数料費	55,000	71,388	16,388	
	学会賞金	900,000	900,000	0	
	メダル製作費	10,000	8,834	-1,166	*名前印字
	若手集会助成金	300,000	300,000	0	*2件
	若手研究者海外渡航援助	300,000	300,000	0	*3名
	青い海助成事業	600,000	400,000	-200,000	*2件
	日本地球惑星科学連合会費	10,000	10,000	0	
	日本地球惑星科学連合寄付金	9,000	9,000	0	
	地学オリンピック協賛金	50,000	50,000	0	
	防災学術連携体会費	30,000	30,000	0	
3. 予備費		4,871,523	0	-4,871,523	
小 計		29,742,723	25,266,097	-4,476,626	
次期繰越金		0	11,677,300	11,677,300	
合 計		29,742,723	36,943,397	7,200,674	

会戻り金約 212 万円および JO 掲載料の増加 76 万円余である。

2016 年度の次期繰り越し金は 11,677,300 円で、2015 年度の 8,466,323 円に比べ 3,210,977 円増加している。ただし上記の様に 2017 年 3 月の会費収入が 3,929,000 円あるため、実質的には繰越金が 71.8 万円ほど少なくなったとみることができる。なお、昨年度は会員情報 WEB システムの初期費用(736,449 円)、会員名簿発行(723,028 円)、選挙を行ったことにより、一昨年度より支出の多い年であった。
(会計担当：齊藤 宏明)

日本海洋学会 2017年度 予算

(2017年4月1日～2018年3月31日)

1. 一般会計

収入の部

単位：円

科 目	2016年度 予算額(A)	2017年度 予算額(B)	差引増減額 (B)-(A)	備 考
1. 会費収入	16,749,400	15,793,700	-955,700	
通常会員会費	13,008,600	12,464,100	-544,500	年会費 11,000 会員 1,259名 納入率 90%
通常会員会費(シニア)	568,800	496,800	-72,000	年会費 8,000 会員 69名 納入率 90%
学生会員会費	972,000	712,800	-259,200	年会費 6,000 会員 132名 納入率 90%
賛助会員会費	760,000	800,000	40,000	年会費 40,000 会員 20名 納入率 100%
団体会員会費	1,440,000	1,320,000	-120,000	年会費 24,000 会員 55名 納入率 100%
2. 事業収入	2,399,000	2,555,500	156,500	
広告収入	519,000	219,000	-300,000	NL4回：2社
会誌売上収入	795,000	772,000	-23,000	JO 20,000 × 13 = 260,000 海の研究 9,000 × 18 = 162,000 セット 25,000 × 14 = 350,000
刊行物売上収入	35,000	24,500	-10,500	要旨集 3,500 × 7 = 24,500
JO掲載料	1,050,000	1,540,000	490,000	
3. 積立金	823,000	823,000	0	
環境科学研究助成	823,000	823,000	0	積立金より(助成金3件60万、環境科学賞副賞10万、委員会費含む)
4. 雑収入	1,005,000	1,003,000	-2,000	
受入利息	5,000	3,000	-2,000	学会基本金等利息
著作権料	1,000,000	1,000,000	0	Springer印税含む(60万)
5. 寄付金	300,000	300,000	0	
寄付金	300,000	300,000	0	海ロマン21 100,000 日本海洋科学振興財団 200,000
小 計	21,276,400	20,475,200	-801,200	
6. 前期繰越金	8,466,323	11,677,300	3,210,977	
合 計	29,742,723	32,152,500	2,409,777	

支出の部

単位：円

科 目	2016年度 予算額(A)	2017年度 予算額(B)	差引増減額 (B)-(A)	備 考
1. 管理費	9,140,000	10,060,000	920,000	
業務委託費	6,800,000	7,340,000	540,000	
会議費	370,000	510,000	140,000	評議員会、賞委員会他
旅費交通費	650,000	650,000	0	諸会合旅費
通信運搬費	350,000	400,000	50,000	通常郵便料、ML維持費
消耗品費	450,000	460,000	10,000	コピー、封筒他
雑費	520,000	700,000	180,000	会費およびJO掲載料クレジットカード入金手数料等
2. 事業費	15,731,200	13,966,200	-1,765,000	
大会開催費	1,000,000	1,000,000	0	2017年度秋開催
海洋環境問題研究会	100,000	100,000	0	
教育問題研究会	100,000	100,000	0	
海洋生物学研究会	0	100,000	100,000	
女子中高生夏の学校経費	50,000	50,000	0	
JO発行経費	6,267,200	6,267,200	0	
海の研究発行経費	1,590,000	1,590,000	0	
JOSニュースレター発行経費	1,480,000	1,480,000	0	4回分
広報経費	150,000	150,000	0	
会誌送料	880,000	800,000	-80,000	団体・賛助等年6回、その他会員NL発送年4回
会員名簿発行費	800,000	150,000	-650,000	異動者名簿制作費(2015年度実績125,172円)
会員管理WEBシステム開発費	1,050,000	0	-1,050,000	初年度のみ
送金手数料費	55,000	70,000	15,000	
学会賞金	900,000	800,000	-100,000	
メダル製作費	10,000	10,000	0	受賞者名刻印
若手集会助成金	300,000	300,000	0	
若手研究者海外渡航援助	300,000	300,000	0	
青い海助成事業	600,000	600,000	0	3件
日本地球惑星科学連合会費	10,000	10,000	0	
日本地球惑星科学連合会寄付金	9,000	9,000	0	
地学オリンピック協賛金	50,000	50,000	0	
防災学術連携体年会費	30,000	30,000	0	
小 計	24,871,200	24,026,200	-845,000	
3. 予備費	4,871,523	8,126,300	3,254,777	
合 計	29,742,723	32,152,500	2,409,777	

水温用データロガー

ティドビットV2

ホボ ペンダントロガー



ホボ ウォーターテンプ プロ V2

仕様	ホボ ウォーターテンプ プロ V2	ティドビットV2	ホボ ペンダントロガー
モデル	U22-001	UTBI-001	UA-001-08 (温度) UA-002-08 (温度・照度)
耐圧深度 (水中)	120m	300m	30m
内蔵バッテリー寿命	6年 (米国工場にて交換可)	5年 (交換不可)	1年 (交換可能 CR2032)
メモリー容量	42,000サンプル	42,000サンプル	6,500サンプル
計測範囲	水中:0°C~+50°C 空気中:-20°C~+70°C	水中:-20°C~+30°C 空気中:-20°C~+70°C	温度:水中0~+50°C,空気中-20°C~+70°C,照度:0~約250,000lux
精度	±0.2°C (0°C~+50°C)	±0.2°C (0°C~+50°C)	温度:±0.47°C at 25°C,照度:概略値取得用
計測間隔設定	1秒~18時間	1秒~18時間	1秒~18時間
専用ソフト (別売)	Windows/Mac対応		
寸法 (mm) / 重量 (g)	30φ×115mm / 43g	30×41×17mm / 23g	58×33×23mm / 18g
バッテリー残量チェック	○	○	○
分解能	12bit	12bit	10bit
通信ポート	USB	USB	USB

電気伝導率 (塩分)

水位ロガー



電気伝導率 (塩分) ロガー



仕様	電気伝導率ロガー
モデル	U24-001
計測範囲 (校正) - 導電率	① 0~1,000 μS/cm ② 0~10,000 μS/cm
〃 (〃) - 温度	5~35°C
精度 (校正範囲内) - 導電率	読値の3% 又は5 μS/cm (大きい方)
〃 (校正範囲内) - 温度	0.1°C
記録容量 (導電率+温度セット)	1範囲指定:18,500 2範囲指定:11,800
最大使用深度/動作温度	70m / 0~50°C
寸法/重量	3.18cmφ×16.5cm長 / 193g
内蔵バッテリー/寿命	3.6V リチウム / 3年

MX2001シリーズ	U20シリーズ
4m,9m,30m,76mモデル	
<ul style="list-style-type: none"> ◎ワイヤレス通信 (iOS, アンドロイド端末) ◎気圧補正センサー一体型 ◎標準ステンレスハウジング ◎海水対応チタンハウジング ◎水位単位直読式 ◎ユーザー交換可能バッテリー ◎30,000サンプルメモリー 	<ul style="list-style-type: none"> ◎絶対圧測定式 ◎気圧補正センサー別置 ◎標準ステンレスハウジング ◎海水対応チタンハウジング ◎廉価版ポリプロピレンハウジング ◎専用バッテリー内蔵 ◎21,700サンプルメモリー

姉妹品：気温、湿度、照度、電圧、電流、光量子、日射、風向、風速、土壌水分、気圧、CO₂、その他

製造者 米国オンセット コンピューター社

総代理店 パシコ貿易株式会社

〒113-0021 東京都文京区本駒込6丁目1番21号コロナ社第3ビル
 TEL:03-3946-5621(代) FAX:03-3946-5628
 URL:http://www.pacico.co.jp E-mail:sales@pacico.co.jp



学会記事 ③ 三賞推薦依頼

日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞 受賞候補者の推薦依頼

2018年度 日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補選考委員会 委員長 宗林 由樹

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補者選考委員会(以下候補者選考委員会という)では、これら三賞の2018年度受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けております。下記参考資料をご参照の上、推薦要領に従って、これら三賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。なお、宇田賞には、研究グループとしての学術業績ばかりでなく、教育・啓発や研究支援などで海洋学の発展に貢献のあった会員を広くご推薦ください。

各賞候補者の選考にあたりましては、会員の皆様からの推薦と賞候補者選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えておきます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦くださいますようお願い申し上げます。

【推薦要領】

以下の項目1～6について、A4版用紙1枚に記入し郵送してください。推薦用紙は日本海洋学会のホームページからもダウンロードできます。

http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards

1. 候補者の氏名と所属機関

(岡田賞の場合は、生年月日も記入してください)

2. 受賞の対象となる研究課題

(宇田賞の場合は、受賞の対象となる学術、教育、あるいは啓発に関する業績)

3. 推薦理由

4. 推薦の対象となる主要論文(宇田賞の場合は省略可)

5. 推薦者の氏名、印および所属機関

6. 推薦日付

なお、審査の際の参考とするため、学会賞、岡田賞の受賞候補者に関しては、各候補者の略歴と業績リストを、宇田賞については推薦対象課題に関する資料もあわせてお送り頂きますようお願いいたします。またいずれの推薦についても、紙の推薦用紙と資料の送付に加えて、それらの情報を編集可能なマイクロソフト・ワードの電子ファイルとしてもCD-ROMに入れて同封するか以下のメールアドレスに添付ファイルとして、お送りいただきますようお願い致します。ワードファイルには印影は不要です。

締切日：2017年8月25日(金) 必着

送付先：〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル9階

(株)毎日学術フォーラム内

日本海洋学会賞候補者選考委員会 jos@mynavi.jp

<参考資料>

日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞細則(抄)

第1条 日本海洋学会賞(以下学会賞という)、日本海洋学会岡田賞(以下岡田賞という)および日本海洋学会宇田賞(以下宇田賞という)を本学会に設ける。学会賞は本学会員の中で海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、岡田賞は受賞の年度の初めに(4月1日現在)36歳未満の本学会員で、海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、宇田賞は顕著な学術業績を挙げた研究グループのリーダー、教育・啓発啓蒙や研究支援において功績のあった者など、海洋学の発展に大きく貢献した本学会員の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。(以下省略)



学会記事 ④

日本海洋学会 環境科学賞 受賞候補者の推薦依頼

2018年度 日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会 委員長 一見 和彦

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、日本海洋学会環境科学賞受賞候補者選考委員会(以下、賞候補者選考委員会という)では、環境科学賞の2018年度受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けます。環境科学賞の制定の経緯、目的等に関しましては、学会HPに掲載の日本海洋学会環境科学賞「設立趣旨」(http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards)または、「海の研究」第18巻第3号(2009年)、および下記の参考資料(会則)をご参照下さい。

なお、受賞候補者の選考にあたりましては、会員の皆様からの推

薦と賞候補者選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えておきます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦くださいますようお願い申し上げます。加えて、多数の候補者が推薦された場合は、若手研究者を優先いたしますが、本賞は、若手に限らず、海洋環境に関わる活動で高い評価を得ている研究者あるいは研究グループのリーダーを対象としますので、推薦要領に従って、本賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。

【推薦要領】

以下の項目について記入し、下記の送付先まで郵送もしくはメールにてお送りください。

1. 候補者の氏名と所属機関・役職名 (生年月日もご記入ください)
2. 受賞の対象となる研究課題
3. 推薦理由
4. 推薦者の氏名、所属機関、メールアドレス
5. 推薦の対象となる主要論文 (省略可)
6. 推薦日付

締切日：2017年9月29日(金)必着

送付先：

<郵送> 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
パレスサイドビル9F

(株)毎日学術フォーラム内

日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会

<メール> 件名を「海洋環境科学賞受賞候補者の推薦」とし、
下記宛に送信
jos@mynavi.jp

<参考資料>

日本海洋学会会則 第6章 表彰

第37条 5. 海洋環境保全に関わる学術研究の発展、啓発および教育に大きく貢献した会員を表彰するため、日本海洋学会環境科学賞を設ける。その規定は細則で定める。

[現在までの受賞者]

- 2010年度 清野 聡子
- 2011年度 梅澤 有
- 2012年度 速水 祐一
- 2013年度 栗原 晴子
- 2014年度 神田 穰太
- 2015年度 野村 英明
- 2016年度 藤井 直紀
- 2017年度 一見 和彦

2017 - 2018 年度 役員

会 長	日比谷 紀之		東京大学
副会長	神田 穰太		東京海洋大学
監 査	植松 光夫		東京大学
	須賀 利雄		東北大学
幹 事 (50音順)	安藤 健太郎	(ニュースレター)	海洋研究開発機構
	石坂 丞二	(JO)	名古屋大学
	市川 洋	(海の研究)	
	伊藤 進一	(庶務、震災対応、教育問題)	東京大学
	岡 英太郎	(庶務)	東京大学
	小埜 恒夫	(広報、震災対応、海洋環境問題)	中央水産研究所
	川合 義美	(研究発表、JpGU)	海洋研究開発機構
	北出 裕二郎	(集会、震災対応)	東京海洋大学
	齊藤 宏明	(会計)	東京大学
	東塚 知己	(庶務、JpGU)	東京大学
	安田 珠幾	(会計、選挙)	気象研究所
	安中 さやか	(選挙、広報、教育問題)	海洋研究開発機構
山田 奈海葉	(集会、研究発表)	産業技術総合研究所	

(JOS ニュースレター編集委員会)

水をみつめて—— T.S.K since 1928

当社は、水を測る機器の専門メーカーとして、この道一筋に今日に至っています。
現在では、過酷な海洋環境に耐え得るノウハウが、ダム、河川に至る水質測定器の開発に寄与しています。



卓上型塩分計

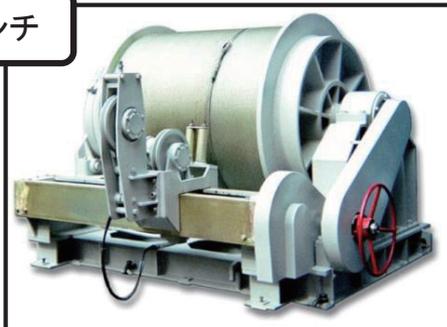
海洋自動観測システム



水質総合監視装置



海洋観測用ウインチ



eXpendable 水温／塩分計



T.S.K

株式会社 鶴見精機

<http://www.tsk-jp.com/>
sales@tsk-jp.com

- 本社・横浜工場
- 白河工場
- TSK America, Inc.
- TSK Liaison Office in India

アカデミア メランコリア (第15回) (若手のコラム)

東京大学農学生命科学研究科 日本学術振興会特別研究員 DC 山口 珠葉

はじめまして、東京大学農学生命科学研究科の山口珠葉と申します。東京大学大気海洋研究所の高木さんよりご指名いただき、第15回の若手のコラムを担当することとなりました。私は亜熱帯貧栄養海域におけるリンの動態、とりわけリン酸の乏しい環境で生物にとって重要な役割を担うとされる易分解性溶存有機態リンという画分に着目し、その濃度分布や生物可用性などについて研究を行っています。

大変ありがたいことに、これまで幾度か研究航海に参加する機会に恵まれ、最も長かったものでは約50日間・15測点の観測に携わりました。こうした研究航海が知的好奇心を刺激する貴重な経験であることは言うまでもありませんが、同時に(主に体力的な意味で)中々ハードな環境であることも否めません。しかしながら、過去にはほぼ5年間・延べ1,000以上の観測点というとてもない規模で行われた研究航海があったことをご存知でしょうか? しかも19世紀に、全長27mほどの帆船で。これはダーウィンの乗ったビーグル号航海(1831-1836)のことで、浅学な私は先日開催されていた大英自然史博物館展にて初めてこの詳細を知りました。この展覧会ではその一角に「世界への探検が遺したもの」と題して、ビーグル号をはじめ、チャレンジャー号やエンデバー号航海にまつわる資料や標本などが数多く展示されていました。それら過去の偉業の数々、そしてその裏にあったであろう労苦を思うと驚嘆の念を禁じえません。一緒に鑑賞していた研究室のメンバーもなまじ乗船経験がある者が多かったためか、皆で測点数が多すぎてぞっとするだとか、試料のラベリングが途方もないだとか、標本の処理・保管はどうしていたのかなど、おそらく一般の方々とは一風変わった視点から展示内容について大いに盛り上がっていました。

およそ200年も前のことに対して、こうした半ば親近感にも似た所感を抱くのは些か不思議な気もしますが、航海という研究手段がある限り、それは今後もあまり変わらないのかもしれませんが、100年、200年後の海洋学や観測技術はどのように進歩しているのか、そしてその時21世紀の我々の活動はどのように捉えられるのだろうか、などと一層取り留めもない思考に至ったところでそろそろ終わりたいと思います。僭越ながらも、自身の研究成果がほんのわずかでもこうした海洋学の発展に貢献できるよう、今後も精進を重ねていくとともに、ここまで拙文にお付き合いいただきましたこと感謝申し上げます。



編集後記



ニュースレターは編集委員会が新体制になって2号目の発行を迎え、今号から新しく富山大の張さんが新しく編集委員として加わっていただきました。よろしくお願いたします。今号は安藤編集委員長に続いて私が編集後記を書かせていただくこととなりました。とはいえ、何を書いたものでしょうか。津田前委員長は編集後記を書くことを楽しみにされていたそうです。理由のひとつは自由に書けるから、とのことでした。私も自由に何か書いてやろうと思っただけで、いざ、となると、要求されたテーマがないと戸惑うばかりです。

よく言われるように、私たちは時に自由を持って余すことがありません。それはおそらく、自分の中に何らかの指針や問題意識がないということに通じるのでしょう。

昔話で恐縮ですが、私の学生時代は、今から見るとずいぶん牧歌的な雰囲気の中で比較的自由に勉強や研究をさせてもらっていました。私に関して言うと、この自由さのおかげでサボったり迷ったり悩んだりを繰り返し、研究は遅々として進まずにいました。締め切りに追われて何らかの原稿を先生に持っていくと、しばらくしてから「これ、自分で読んでみた?」と聞かれ、当然ながら「はい」と

答えます。すると笑顔で「ふーん、じゃあ書き直して」と何も添削されていない原稿をそのまま返されたこともありました。それでまともなものができるわけでもありませんので、結局は先生の手間も余計にかかるでしょうし、第一仕上がるかどうかさえ怪しいところです。学生の不手際のために陰で誰かに頭を下げることもあったでしょうし、昔の先生が学生を信じて責任を取る覚悟には相当なものがあつたのだと思います。でも、私にとっても、この自由さのおかげで、ものごとは自分で考えなければいけないのだという覚悟みたいなものは身についたかなと思います。自由さの中で迷うこともあながち悪いものではないかな。

自分の学生時代がどうであったかを考えると、とてもじゃありませんがエラそうに学生に意見をすることなんかできないのじゃないかと思ってしまうのですが、自分のことは棚上げて原稿を突き返しています。やはり自分が教えてもらったようにしか教えられないのだなあ、そういうものからもなかなか自由になることは難しいのだなあ、と変な感慨をもっています。

ニュースレターには海洋学会員の皆さんのリアルタイムの活動の情報が掲載されています。記事からはそれぞれの方が海洋学にかか

わる知見を広げるためにいろいろなことを考えていらっしゃる様子が生々しく感じられ、読み物としても楽しいものとなっています。私は海洋学会は良くも悪くも比較的リベラルな学会ではないかと思っています。この学会の中で個々の会員の方々の活動はどのように結び付いていくのでしょうか。海洋学の個々の知見を大きな学説に融合していく指針を我々は持っているのでしょうか。それは真理の代わりにパラダイムを座標軸とすることで知識の海を相対的に漂っていくのか、生き残る学説は後から見ると合理的であるから個々の活動は全く自由でも構わないというものなのか。先日、「村上陽一

郎の科学論」という本をたまたま見つけて、懐かしくて手に取ったのでそんなことも考えました。いずれにせよ、未来からの視点で現在を見ることはできないということは確かだと思いますから、リアルタイムに研究をしている私たちは、個々の研究者の考えの合理性を信じてみるしかなさそうです。学会関係の様々な活動の動向を眺めながら理論形成の現場を観察してみるのも暑い毎日の一服の清涼剤になるかもしれません。いや、かえって頭が沸騰するかもしれません。この辺でやめておきましょう。拙文にお付き合いくださりありがとうございます。(編集委員：根田)

訂正およびお詫び

JOS ニュースレター第7巻1号(2017年6月1日発行)において誤字がありました。関係者にお詫び申し上げますとともに、下記の通り訂正します。

JOS ニュースレター編集委員長 安藤 健太郎

記

JOS ニュースレター第7巻第1号13ページ「情報③海外渡航援助報告」著者名

正) 小柳津 瞳

誤) 小柳津 瞳

広告募集

ニュースレターは学会員に配布される唯一の紙媒体情報誌です。
海洋学に関連する機器や書籍の広告を募集しています。
お申し込みは日本海洋学会事務局またはニュースレター編集委員長まで。

〒237-0061 神奈川県横須賀市夏島町2-15 国立研究開発法人海洋研究開発機構
電話/FAX 046-867-9462 / メール andouk@jamstec.go.jp

JOS News Letter

JOS ニュースレター
第7巻 第2号 2017年8月1日発行

編集 JOSNL 編集委員会

委員長 安藤健太郎 委員 小守信正、根田昌典、田中祐志、張勁

〒237-0061 神奈川県横須賀市夏島町2-15

国立研究開発法人海洋研究開発機構

電話/FAX 046-867-9462

メール andouk@jamstec.go.jp

デザイン・印制 株式会社スマッシュ

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町68

西川徹ビル1F

http://www.smash-web.jp

発行

 **日本海洋学会**
The Oceanographic Society of Japan

日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル9F

(株)毎日学術フォーラム内

電話 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555

メール jos@mynavi.jp

※今号の表紙写真は、2012年8月白鳳丸による西部亜熱帯太平洋付近でのプランクトン採集風景であり、東京大学齊藤宏明会員から提供いただきました。各記事タイトル横の写真のうち執筆者の顔写真を除く写真は、トリコデスミウム(シアノバクテリア)に付着する動物プランクトンで、同じく東京大学齊藤宏明会員から提供いただきました。表紙に使用する写真等、随時募集しています。